

LW受容協力医師制度の展望

ルポ——横浜のドヤ街の孤独死をなんとか防ごうと

身寄りのない人に寄り添う山中修医師の活動と想い

1枚の孤独死の写真が、山中医師の背を強く押した。

「この国で、こういう最期があつていいのかわからない。ここで生きると決め、寿モデルを作り上げる。」



寿地区に隣接する不老町にある「ポーラのクリニック」

横浜・寿町といえ、東京の山谷、大阪の西成あいらん地区（釜ヶ崎）と並ぶ「日本三大ドヤ街」の一つとされる。「ドヤ」とは「ヤド（宿）」の逆さ読みで簡易宿泊所のこと。2段ベッドなどを数人で利用したりする場合もなくはないが、今は3畳ほどの狭い個室を単身で利用するドヤがほとんど。1泊2200円ほどだ。

こうしたドヤが、ここ寿町には、わずか300メートル四方に120軒も建ち並んでいる。約6000人が暮らしているが、そのうちなんと9割近くが生活保護受給者だ。高齢者の割合も高く、

65歳以上が半数を占める。戦後から昭和末期のバブル期にかけて物資の集積地となった横浜港周辺に、全国から港湾の荷役・土木労働者が単身でこの地域に住みつくようになって形成された「町」だ。歩いてみると、コンビニのレジ袋を持ったジャージーにサンダル履きの高齢者や、足を引くような歩きに歩くハンデを負った住人を何人か見かけた。

そんな、この町の近くに山中修医師（65）が医院「ポーラのクリニック」を開業したのは2004年、50歳の時。きっかけは1枚の写真だったという。

「3畳1間の孤独死の写真を見せられましてね、腐乱する前の。『ここでは、こうやって死んでいく人が多いのよ』と言われて」

「医衣職食住」の改善を支援するNPOを設立

写真を見た山中医師は「なんだ、これ」と思ったという。狭い部屋の枕元には葉の山があつた。様々な薬のラベルが見えた。この国で、こういう最期があるのか。看取られず、薬だけ与えられて放置されたような状態での、そんな最期が、と思ったという。「ある意味、許せない感覚があつたんですよ。こ

れが医療なのか、とね。少し青臭いけど……」と、当時を振り返る。これまでの自分の日常とはまったく違う世界がそこにあり、それまでの診療観が一瞬で変わるのを感じたという。

三重県で生まれ、順天堂大学医学部に進んだ。両親とも医師で、「父親に懇願される形」での進路だった。卒業後はアメリカの病院や横浜の国際親善総合病院（親善病院）に勤め、そこで循環器内科部長をしていた折に寿地区とのかかわりを持つ。「路上生活者に毛布を届ける」という慈善活動を通してだった。2000年に同じ志

を持つ仲間たちと、この路上生活者や独居高齢者の「衣食住」に「医療」と「就労」を加えた「医衣職食住」の改善を支援するNPO法人「さなぎ達」を設立。その4年後に、「患者に徹底的に伴走していきたい」との思いを実現すべく、「ポーラのクリニック」を開業したのだ。

親善病院を退職し、開業までの8カ月間、無給で皮膚科、整形外科、泌尿器科の研修を受けたというから、「ここで住民とともに生きる」という山中医師の強い決意のほどがうかがえる。親善病院にいた間、地域での医療のあり方を考えてはいたが、いざ寿でやろうとなると、悩んだこともあった、と漏らした。

「孤独死を防止できる青写真がありました」

では、何が決断への背を強く押したんですか？と聞くと「うーん」と少し考え、「こっちのほうが全国的な問題を抱えていたからかな」と言った。さらに「こういう



「孤独死」とは「社会との関わりを失った延長線上の死」です。たとえ一人で亡くなっても、直前まで私たちチームとの関わりを持っていた死は、孤独死じゃない」と語る山中修医師



以前は木造の古い簡宿が多かったが、今はビルが増えてきた

ことをすれば絶対に孤独死を防止できる、という青写真がありましたから」「一生かけてでも、寿モデルを作りた」と付け加えた。10年先、20年先、少子高齢化がま

すまず進む日本。老老介護の末に1人残された独居高齢者……。「その先取りのような形が、ここ寿にあるんです」。医療者、看護者、介護者、行政、地域住民、民生委員、帳場（寿町で呼ばれる簡易宿泊所の管理人のこと）が連携して当たる「見守り・看取りチーム」。つまりその「寿モデル」を全国に広げ、その地域独特の独居者への対応方法を探っていけば、孤独死は激減できる、というのだ。

これまでの医院の診療統計（2005年1月～18年2月）によると、14年間の外来受診患者総数は約6700人。追跡できた死亡患者数402人（4人の自死を除く）のうち、予期しない簡易宿泊所内死亡（いわゆる孤独死）が59人（平均66歳）、簡易宿泊所内看取りが133人（平均76歳）、

加療中の急変による入院搬送先死亡が210人（平均75歳）だった。いわゆる在宅看取り率は33%。全国平均が12%とされるから、山中医師のチームによる在宅看取り率がいかに高いかがわかる。

こうした地域への貢献、身寄りのない人に寄り添った生活全般の支援に対し、2016年、「第4回赤ひげ大賞」（日本医師会主催）が贈られた。授賞の理由はこうだ。「家族がいない人のための町医者」になることを診療の理念として、身寄りのない高齢者や疾病を抱えた地域住民の人生の質の向上を目指している……」。

山中医師にとって、何よりの励みであったか。

会報編集部・郡司武

LW受容協力医師とは
当協会のLWの趣旨に賛同し、氏名を公表して会員の力になりたいと表明された医師。現在2000人近くが登録。
登録医師には協会が「認定証」を発行。最新リストは支部HPから閲覧することができます。